

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 文献レビュー1

アナベル・ニューマン(1998)『読み書きの学び：成人基礎教育入門』

メタデータ	言語: ja 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2023-11-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福村, 真紀子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0002000098">https://doi.org/10.15084/0002000098</a>

アナベル・ニューマン 著

平沢安政・岩槻知也 監訳

## 『読み書きの学び：成人基礎教育入門』

解放出版社、1998

福村 真紀子（茨城大学）

監修：角 知行

2023年10月31日

### ①問題提起

著者のアナベル・ニューマンは、言語教育学者・実践家である。本書は、アメリカにおける成人基礎教育の識字教育に焦点をあて、その教育実践のあり方を問うものである。本書では、「アメリカの人口のうち、かなりの割合の人々が読み書きの能力をもたず、現在や未来の課題に対してチャレンジする能力ももたず、またそのような問題があることを訴えることもできない状態にある」（pp.1-2）と、問題の所在を明らかにしている。本書の冒頭部分からは、都市貧困地区の非識字者にとって読み書きが必要であること、そしてこの識字問題は一朝一夕には解決しないという現状を見据えつつ「私たちの社会には、問題の解決にむけた多大な可能性が秘められている」（P.5）と、問題を乗り越えようとする情熱が伝わってくる。経験豊富な成人基礎教育の講師だけではなく、ボランティアの人々にも識字問題に立ち向かうことが期待されている。非識字者は、「チャンスさえあれば社会的に力を発揮しようとしている」（p.6）主体であり、成人基礎教育に携わる者は社会を構築する主体であるはずのかれらにそのチャンスを提供することができる、と著者は主張する。では、どのように識字問題を捉え、どのように識字教育を行い、どのように非識字者に社会に力を発揮するチャンスを提供すればよいのだろうか。この問いが、本書が提起する問題である。

### ②なぜその問題が重要か

本書の各章の冒頭には、成人の非識字者が抱える問題を表す実際のエピソードが紹介されている。読み書きができないことを子どもに知られないようにしている人、読み書きができないために仕事を辞めなければならなかった人、弟や妹の面倒をみるために十分に学

【文献レビュー1】

校に行けず読み書きの力が養えなかった人など、小学校低学年レベルの読み書き能力しか持たない人たちが登場する。かれらの読み書きのニーズに加え、読み書き以外のニーズや生活上の切実な課題が、エピソードには示されている。「私たちの最大の未開発資源は、社会の周縁に暮らしてきた多くの人々である」(p.6)という言及から、エピソードの登場人物たちが開発されるべき貴重な資源であることがわかる。この貴重な資源が社会で活かされるために、どのように識字問題を捉え、どのように識字教育を行い、どのように非識字者に社会に力を発揮するチャンスを提供すればよいのかという問題が重要なのである。

著者は、本書で識字教育の実践のあり方を論じようとしており、「効果的な学習を計画し実行するために、講師はまず学習者がどのような人なのかを知る必要がある」(p.8)と述べている。著者の識字教育に対する姿勢は一貫している。それは、「あくまでも学習者を中心に据える」(p.iv)ということである。「本書に示された具体的な方法の数々が物語っているのは、学習者自身の意欲や要求を抜きにした学習はあり得ないということ」(p.iv)という言及からも、①で述べた問題提起の重要性は、学習者中心という教育観にも起因していると考えられる。

### ③問題解決の方法

どのように識字問題を捉え、どのように識字教育を行い、どのように非識字者に社会に力を発揮するチャンスを提供すればよいのかという問題解決のために、本書は2章以降でさまざまなポイントをあげてヒントを与えてくれる。そのポイントとは、(1)学習者の特徴診断、(2)目的と目標、(3)評価の計画、(4)学習方法の計画、(5)組織化、(6)資源の計画、(7)学習の統合、(8)学習者と講師の相互評価、(9)修正である。以下、それぞれについて簡潔にまとめる。

#### (1)学習者の特徴診断 (第2章)

著者は、成人基礎教育の入り口として、学習者を知ることが重要視する。特に最初の顔合わせで学習者と知り合い、互いに経験を分かちあうことを通じて、学習者のニーズと目的を探ることを促している。学習者に読み書きを学ぼうとする理由は必ず存在するが、最初の顔合わせでは本当の理由はわからない場合も考えられる。そこで、「インフォーマルな興味のリスト」(p.27)を使うという方法が示されている。この方法は、「学習者の興味や背景を診断するのに役立つ、その結果は、適切な教材や参考資料を選択する際にも役立つ」(p.27)のである。「週末は何をして過ごしますか」「旅行をしたことがありますか」など、学習者の個人的な興味を知るための質問を重ねるといえる。「講師は教育者であると同時に心理学者でもあるべきだ」(p.30)と述べられているように、学習者をリラックスさせ、学習の動機を引き出すことも必要である。学習者中心という著者の教育観に依るものであることが理解できる。

次に、読みのレベルがどの程度なのか把握するために「インフォーマルな読みのリスト」

【文献レビュー1】

(p.31) を使用する。それは、「レベルの異なるいくつかの文章と読み手の読みの力を確認するためにつくられた質問がセットになったもの」(p.31) であり、学習者がリラックスして質問に答えられるように形式ばらないように工夫する必要がある。他にも「標準テスト」を通して学習者の能力を比較検討するために用いられる方法が紹介されているが、その結果が学習者の自信をくじくことがある可能性も示されている。

学習者の特徴診断において留意すべきことは、「学習者に対して、早い時期に、継続的な診断を行うことによって、学習への抵抗を和らげたり、学習者を適切な目的や目標に向かわせるための手がかりを見つけることが重要である」(p.40) ということである。

## (2)目的と目標 (第3章)

著者は、目的と目標の違いを明らかにしている。本書が扱う「目的」とは「大きな目的」である。「大きな目的によって、必要とされる学習の内容が決まる」(p.43-44)。一方、「目標」とは「目的」を支える「具体的な目標」である。たとえば、「情報を得るために読む」という目的を支える目標は、「本から情報を得る」「新聞から情報を得る」「雑誌から情報を得る」(p.45) が挙げられている。そして、「慎重に選択され細かく点検された大きな学習目的が、よく考え抜かれた具体的な目標に支えられてこそ、より確かな成果をおさめることができる」(p.56) と説明される。

講師は、学習者の興味とニーズを支援するために学習者の目的を、「学習のなかにきちんと位置づける」(p.43) 必要性を論じている。また、「学習の過程で、学習者が何を達成したいと思っているのかを見つけ出すことも重要である」(p.43) と述べられているように、学習の開始時だけではなく、学習期間を通じて、目的と目標の見直しが求められていることがわかる。成人基礎教育のプログラムにとって、大きな目的、具体的な目標は必須である。著者は、「目的や目標を効果的なものとするためには、その達成に必要な課題が適切に定められていなければならない」(p.54) と述べ、最も意味のある目的を「学習者の興味や能力、ニーズを反映したもの」(p.54) とする。そして、目的は講師が学習者と共同で作りあげていくべきだと主張する。「講師は、自分が必要だと考えるものと学習者自身が適切だと感じている目的とを結びつけるよう努力すべきだ」と述べられているように、目的と目標の設定は教師主導によるものではないということが示唆される。

## (3)評価の計画 (第4章)

学習の達成度の評価方法は、学習の目的と目標の中身によって決まる。いつ、どのように、目的と目標が達成されたのかを見定めるのだろうか。具体的な目標に対する評価方法を決めるのは比較的容易だが、大きな目的に対する評価方法の決定は簡単ではない、と著者は述べている。そして、「目的の本質的な要素を理解すること、そしてその部分こそが目的の達成には不可欠だということを認識してはじめて、その目的が達成されたかどうかを判断することが可能となる」(p.59) と論じる。さらに、「講師は、学習者がそれぞれ固有

【文献レビュー1】

のニーズを持っているということも忘れてはならない」(p.62)と述べ、学習者のペース、自立の度合いが多様であることを認識し、学習者の尊厳を傷つけたり進歩を妨げたりすることのないようにする留意が必要であると説く。

そして、一般基準によるテストの意義について触れ、無理に学習者に一般基準によるテストを受けさせて挫折感を味わわせるよりはそのようなテストを用いない方がいいということも述べている。「一般基準テストの目標は、決して個々の学習者の目標より優先させてはならない」(p.65)と述べられているように、あくまでも学習者個人のニーズ、レベルが重視されている。著者は、個別基準テストの方が有益で適切だとみなされることにも触れながら、個別基準テストの限界も論じている。たとえば、「個別基準テストでは「読むことができてうれしい」というような、学習者の情緒的な反応を適切に測定することは困難である」(p.66)という限界である。よって、「講師は、必要とされる読みの技能を教える一方で、学習者の主観的な気づきを認め、激励することによって、学習者の読むという経験における実質的で永続的な進歩に貢献せねばならない」(p.67)のである。この評価の方法は、いわばインフォーマルな評価のしかたである。第4章の「まとめ」には、ウェイン・オットー(Wayne Otto)が提案したインフォーマルな評価の手順が紹介されている(p.75)。その手順から、既存のテストをそのまま利用するのではなく、学習者の目的と目標と照らし合わせて作り変える必要性がうかがえる。講師自身が評価することの意義と方法を批判的に捉えていく必要性がわかる。

#### (4)学習方法の計画(第5章)

学習だけではなく、何にも興味を持たない学習者というのも存在する。特別な興味を示さない学習者に対してはどのような学習方法を計画すればいいだろうか。著者は、「成人を対象とした学習方法を開発する際には、次の3つの要因を考慮する必要がある。それは、(1)学習者のニーズ、(2)学習の内容、(3)講師の教えかた、である。そしてこれら3つの要因は、お互いに影響を及ぼしあう」(p.76)と述べ、さらに、「最もうまくいく学習方法のひとつは、学習者の関心やニーズから出発するものである」(p.76)と主張する。ここにも、学習者中心を核とする教育観が表れている。

著者は、「読みを学習する成人にとって、使用教材がその生活経験に関係しているほど早く学習がすすむ傾向がある」(p.79)と述べ、具体的な学習方法として「体験文字化法」を紹介する。この方法では、学習者に学習者自身がよく知っているトピックについて話させ、講師は興味を持って傾聴し、学習者の発話を促進する。そして、会話を録音して後で文字化する。この方法をとる理由は、学習者の多くが、「話しことばに強く依存するために、話す力がよく発達している。したがって学習者は、話す力と書きことばがどのようにつながっているのかを理解する必要がある」(p.79)からである。体験文字化法は、話す力と書きことばの関係を「数分のうちに」(p.79)学習者に理解させて、学習への動機を高める効果が期待できる。さらに、著者は、「体験文字化法の本当の価値は、学習者が長期的な目的と

【文献レビュー1】

ともに、目の前の現実とつながった目的を認識することにある」と述べている。つまり、教室の中での学習を教室の外の日常につなげることができるということだろう。このことは、「成人基礎教育においては、学習したことを、できるかぎり教室以外の場でも適用できるようにする必要がある」(p.98) という言及からも理解できる。

**(5)組織化 (第6章)**

学習者の中には自信が持てず集団で学習することが苦手な人もいる。学習活動を計画する際には、このような学習者への配慮も必要で、組織化についても考える必要がある。著者は、「組織化のパターンとは、学習者の個性や学習の内容と目的を考慮に入れながら、時間、場所、人を有効に利用するための計画である」(p.110) と述べる。留意点は、「時間の問題や、講師と学習者の物理的な位置関係、人間の相互作用が学習に与える影響を把握」(p.110) し、「必ず学習者個人の特徴、学習の内容、プログラムや学習者にとっての目的や目標を考慮」(p.111) することである。

時間の計画では、成人基礎教育プログラムの期間、毎回の学習時間、進度について考える必要がある。確実な学習の進歩のために定期的にできれば最低週に2回行うことが提案されている。学習の集中時間は1時間で、2時間行うときは途中で休憩を入れることも提案される。場所の計画では、教室の雰囲気だけではなく、学習者が交通手段を通して通って来られるかという地理的な要因にも配慮する必要性が示されている。そして、公立図書館の利用が薦められている。人の計画では、相互学習を重視し、グループ学習が提示されている。そして、グループ学習であっても、学習者個々のニーズに基づいた指導計画が必要であることが示され、組織的な柔軟性が重視される。

**(6)資源の計画 (第7章)**

教材選びは、識字教育において重要である。著者は、学習を計画する際の教材選びを、「資源の計画」と位置づけて論じている。本書では、資源を「学習者自身に備わっている資源」「無料もしくは安い資源」「地域にある資源」「その他の資源」「市販の教材」「独自の基準をつくるために役立つ資源」「利用できる専門的資源」にカテゴライズし、それぞれの意義や課題について詳述している。

中でも、最も重要な資源と位置づけられるのは「学習者自身に備わっている資源」である。講師は、「学習者の特徴を資源として理解すること、すなわち学習者自身が学習の場に携えてくるものを理解することが必要なのである」(p.119) と説明されている。なぜなら、「学習者が現実的で、自分自身の経験や要求に関係のある教材を優先して学びたいと考える傾向にある」(p.120) からである。「学習者自身に備わっている資源」には、「個人的な背景」「講師と学習者の共通の関心」「学習への意欲」「仕事の関わる経験」「人間関係」「まわりの環境」が挙げられている。たとえば、学習者の背景に困難な過去がある場合、講師が学習者に共感し理解しようとする態度を示すことで、学習者はその背景を講師と共有し

【文献レビュー1】

たいと考え、その後の学習が有望になる。また、「学習者と講師のあいだに類似の関心や経験―職業、勉強した科目、旅行の行き先、料理法、お気に入りのテレビ番組など―が見つかったら、講師は、このようなお互いの共通経験について、学習者と切に話しあいたいと考えるべきである」(p.121)と述べられている。その話しあいから、実際に共通の好きな食べ物を一緒に食べたりするきっかけになり、リアルな読みの活動につながる可能性があるからだろう。このように、「学習者自身に備わっている資源」は、教室内と教室外をつなぐことができる教材と言える。

クーポン券や地図や歌を含む「無料もしくは安い教材」、全米識字ボランティア協会や図書館を含む「地域にある資源」など、「学習者自身に備わっている資源」以外の資源について触れた後、著者は「要するに、学習者の学習を支援するためのまず最初の、そして最も質のよい資源は、学習者自身の経験のなかに見つけられるということを心にとどめておくべきである」(p.165)と主張する。そして、教材は、「学習者一人ひとりの経験にとって意味があるのかどうかという点で評価され、選択されるべきなのである」(p.166)と説く。

### (7)学習の統合 (第8章)

学習を計画する際には、学習方法、組織、資源をうまく統合する必要がある、と著者は述べている。うまく統合された学習計画があれば、「講師や学習者は、今後の方向や目的、学習後の成果を実感することができる」(p.167)のである。うまく統合されていない学習の失敗例が、pp.197-168に紹介されている。失敗の原因は、学習者のニーズや関心に講師が応えておらず、教材を有効に活用していないこと、学習者が授業の内容を実生活と無関係なものとして捉えていることに講師が気づいていないことである。

統合的プログラムの作り方については、「資源・組織と学習方法をうまく統合するために、講師は読みを学習するプログラムの究極的な目的を心得ておかなければならない。それは、学習者が内容を理解しながら読めるようになるということである」(p.169)と述べられている。そして、「学習者の理解を助け、文字の世界がもっている利点を生かすような教材や手法を開発する」(p.169)こと、プログラムを「学習単元を中心に構成する」(p.169)ことが提言されている。

学習の統合のしかたについて、本書では単元学習が強調されている。この単元学習の利点として、「学習者の興味にそっているので、学習に対する抵抗感を克服することができる」(p.170)、「考えをまとめたり、教材をうまく活用したり、共通の目的にむけて集団でとりくんだり(リーダーシップをとったり、委員会活動に関わったりする経験)、調査データをもとに、意味のある判断を行ったりする力をつけるのにも役立つ」(p.170)ことが挙げられる。さらに、「単元として適切な課題を学習者とともに見つけ出し、学習者の関心を引くやりかたで、テーマを紹介する必要がある」(p.173)と述べ、テーマの見つけ方についても示唆している。

【文献レビュー1】

**(8)学習者と講師の総合評価 (第10章)**

著者は、「評価」と「総合評価」の違いについて述べている。評価とは、「学習者の進歩を、あらかじめ定められた目的や目標に照らし合わせて測定すること」(pp.224-225)である。一方、総合評価とは、「より広い意味をもち、学習者の進歩と講師の決定の双方を対象としたものである。つまり学習者の評価の結果をもとに決定した学習の目標、方法、学習の組織化、資源などを修正すべきかどうか判断するものである」(p.225)と説明される。学習計画の際に大きな目的と具体的な目標を立てるが、学習過程において、この目的と目標に何度も立ち戻る必要がある。総合評価によって、学習計画の際に立てた目的、目標の再考が必要になることもあり、学習の方法、組織化、資源の再考をすることにもつながるのである。著者は、「明確な目的を達成可能なものとするには、学習の方法、組織化、資源という3つの決定領域において、幾度もの調整を行わなければならない」(p.230)と説いている。そのために、講師は、「私たちは、最も効果的な手段で目標を達成しようとしているだろうか」(学習方法)、「私たちは、最も効果的に目標を達成するために、時や場所、人について、適切なかたちで学習を組み立てているだろうか」(学習の組織化)、「私たちは、目標を達成するために最も適切な教材を選んでいるだろうか」(資源)」(p.231)と繰り返し自問を行うべきである、と示されている。つまり、講師は常に総合評価を通して実践の省察を繰り返し、柔軟に学習計画を再構築しなければならないのである。

**(9)修正 (第11章)**

総合評価を通して学習計画は修正されるべきである。著者は、「自ら立てた計画を少しも変更することなく、どんどん推し進めてしまう堅い考えの持ち主は、成人基礎教育を実践するうえで問題を抱えることになるだろう」(p.233)と警鐘を鳴らしている。そして、教育のあるべき姿として、「忍耐し、注意深く耳を傾け、そして、新しい洞察に沿って、的確な変更をいつでも行えるようにしておくべきなのである」(p.235)と説く。さらに、学習について最も重要な基準は「学習者と講師がいっしょに決めた目的・目標を、学習者は少なくともある程度は達成しつつあるだろうか」(p.236)という問いであることが示されている。学習計画をいつでも修正できるような柔軟性と勇気が求められていることがわかる。

**④結論**

本書の第9章では、著者やその仲間が実際に識字教育でかかわった非識字者であったC.J.の31か月にわたる学習記録となっている。成人基礎教育の識字教育が実際にどのように展開されていくのかが、詳細な記録を通して把握できる。学習前のC.J.の読む力は小学1年生か2年生レベルだった。学習は、彼の体験談を著者がタイプし、その後一緒にその体験談を読むという活動からスタートした。彼の目的は海軍に再入隊することで、それが学習に対する強力な動機づけとなっていた。他にも車の運転免許を取る、中古車を買うなどの目的もあった。学習を通して、識字教育の実践者である著者らは、C.J.の興味や能力を明



【文献レビュー1】

らかにしていった。C.J.は、立身出世した人々に強い興味を抱いていたので、「ヘンリー・フォード (Henry Ford) に関する語彙数の少ない本」(p.195)を読ませたところ、「強い関心を示し、たちまち読破してしまった」(p.195)のである。著者らは頻繁に彼と面談をし、彼自身の語りに耳を傾け続けた。C.J.は自尊心を高め、態度がより自信に満ちたものに変わり、身なりにも以前より注意を払うようになっていった。そして、31か月の間に読む力を5学年程度も向上させたのである。雑誌や新聞をふつうに読むことができ、書くことも内容、形式ともに力を伸ばした。経済的にも自立できた。「彼は、学習し、成長し、自立し、自信をもって新しい状況に適応できるようになったのである」(p.222)。

C.J.の学習記録からわかることは、学習者中心を核とした教育観の妥当性である。車が好きで、立身出世をした人に興味を示す学習者に対して、ヘンリー・フォードに関する本を教材として選んだり、学習者個人に寄り添ってその語りに傾聴する態度を実践者が示したりしたことが、学習者の読み書きの力の向上に功を奏したと言える。第9章の最後は、以下のような文章で結ばれている。

同世代で刑務所に入っている非識字者のなかには、事実の面でも、気持ちの面でも、C.J.とまったく比較にならないような人々もいる。彼らを刑務所に収容するために、どれだけのお金がかかっていることか。C.J.はきちんと税金を納め、社会に何の負担もかけていない。福祉に依存したこともない。彼が成長した日々を彼と共有できたことを、私はとても満足に感じている。(p.222)

本書が提起する問題は、どのように識字問題を捉え、どのように識字教育を行い、どのように非識字者に社会に力を発揮するチャンスを提供すればよいのか、ということである。C.J.の学習記録から、識字教育の実践者が、彼を何もできない非識字者とみなさず、彼の興味を尊重して学習を設計し、自尊心を失わないように評価することで、社会に力を発揮するチャンスを与えたことがわかる。C.J.の成長のプロセスこそが、本書の結論と言える。

#### ⑤誰にとって、どのような成果があるのか

「はじめに」(pp.1-6)に本書の目的が述べられている。「このハンドブックは、成人の読みの教育に現在携わっている、あるいはこれから携わりたいと考えている講師、ボランティア、行政職員、およびビジネス・産業界のリーダーのためにつくられたものである」(p.1)と書かれてあるように、本書は識字教育の実践者向けのハンドブックの様式となっている。しかし、マニュアル本のように体系的に教授法をまとめたものではない。「問題解決にとりくむ人々が、その指導をさらに発展させ、あるいは指導に取り込むことのできるような方法を集めたものである」(p.1)とあるように、実践者が主体的に考えながら実践を行う上で実践のヒントが引き出せる内容である。監訳者は、本書はアメリカの実践にもとづくものだが、「日本の識字教育や日本語教育に携わる人々にとっても、じゅうぶん有

【文献レビュー1】

益なものとなるに違いない。すでに識字教室・日本語教室の講師や行政の担当者となっている人にとっては、日々の実践を整理・点検するための指針として役立つであろう」(p.v)と述べている。

日本には、識字教室や地域日本語教室がさまざまな地域に存在している。余儀なく学校教育の現場に参加できなかった人や、日本語が自在に操れないまま日本で生活している人など、日本語の読み書きの力を必要とし、教室に参加する多様な人たちがいる。そして、その人たちが求める読み書きの力を向上させるために、学習を支援する人たちも存在する。その学習を支援する人たちも多様である。学習を支援する人たちにはそれぞれの教育観、学習観が存在する。つまり、識字教育の捉え方が多様なのである。ひらがなを丁寧に指導し、ひらがながマスターできれば次にカタカナ、その次に小学校1年生が学習する漢字、というように表記の学習を積み上げ式に計画する支援者は多いだろう。積み上げ式が悪いというわけではないが、支援者たちが本書を読めば、支援にあたる際に最も重要なことは何かに気づくのではないだろうか。それは、学習者中心、というポイントである。より具体的に言えば、学習者の興味を尊重することである。さらに、大きな目的とその目的を支える具体的な目標の設定の重要性にも気づくはずである。本書は、識字教育、日本語教育に携わる人たちにとって、学習者を中心に考え、目的と目標なき実践を見直すという成果が期待できる。

本書でも述べられているように、読み書きを学ぼうとする人たちは、社会の資源である。この貴重な資源が社会で生かされるために、本書は識字教育の実践のあり方をハンドブックというアプローチで示しているのである。

本文献レビューは、国立国語研究共同研究プロジェクト「定住者外国人よみかき研究」の研究成果である。また、本文献レビューの内容に対する責任は本プロジェクトが負う。